

松村通信第68号

2008年3月20日

松村勝弘

混迷の時代を「思い」をもって 生きる

久しぶりに、「松村通信」を書いてみようと思う。最近は日記などで書きつづっているの、「松村通信」でまとめて言うことも少ない。ただ、3月ということで、ゼミ卒業生を送り出すこの機会に、少し書きつづってみようと思う。

混迷の時代 今まさに、混迷の時代だ。世界同時不況が懸念されている。サブプライムローンから始まって、混迷は金融から実物経済にまで波及しつつある。根本的には世界の経済、貨幣の循環構造に無理があった。米国は消費をし、中国、日本、そして産油国が資金を環流させて米国の消費をファイナンスしてきたが、これはドルが基軸通貨であるからこそ可能だったわけだ。国際通貨体制といった制度は容易に変わるものではない。米国が世界一の経済大国である今すぐに、ドルが基軸通貨から滑り落ちるとは考えられない。しかも、財政よりも金融に過剰に依存した景気対策が採られ続けてきている。政策的には流動性供給を続けてきている。だからまたドルが垂れ流されることにもなる。これが世界的な不動産価格高騰をもたらした。それがここへきて限界に達したかに見える。

変えられるのは未来と自分 いずれ円高ドル安は行き着くところまで行くのだろう。金融市場もいましばらく混迷を続けるのだろう。こういう混迷の時代を生きなければならぬ。個人の問題として言えば、内外の政府その他の無策を悲憤慷慨してみても始まらない。以前も紹介した小山昇『会社開眼の法則』（TBSブリタニカ、1996年）の言葉に従えば、「過去と他人は変えられない。変えられるの

は未来と自分です」ということになる。

卒業してこれから社会人第一歩を踏み出そうとする若い人たちにとっては、未来はたっぷりある。まだまだ自分を鍛えることもできる。そういう意味で可能性に満ちている。われわれ年配の人間から見ればそれがわかる。文化的人間的深みのあるひととして成長していったらと思う。歴史に学ぶべきだと思う。確かに、ハウツー書も必要だろう。大いに読むべきだと思う。けれどもそこからは大局観は出てこない。市場相場でもそうだけれども、また営業での商品販売でもそうなのだが、大局観を持って対処していくとまちがいが少ない。そういった大局観は歴史を学ぶことによって得られる。儒教、仏教、キリスト教などという宗教に裏付けられた宗教感というか倫理感も、その場合大切である。生き方、哲学を徐々にでも身につけていったら欲しい。でないと、何か事が起こったときに、戸惑うばかりである。これは自省の念も込めて言っているのであるが。

思う、為す、成る 確か誰かが言われていたことだが「思う、為す、成る」である。言い得て妙だと思う。私自身この言葉を最初聞いたときその意味するところをつかみかねた。最近になってハッキリと、私なりにこれを自分の中に落とし込めるようになった。それは、この中で一番大事なのは「思う」ということだと了解したからだ。つまりまず自分は何になりたいのか、そういう「思い」が必要だ。まず思わない限り、何にも成れない。で、その思いを実現するために「為す」というか「行う」必要がある。そうして初めて「成る」、実現するわけだ。この場合、一番大事なのは、「思う」ことである。まずもって思わなければならない。自分は何になりたいのか、どういう人間でありたいのか、どういう

ことをしたいのか、そういう思いがあって初めて、行動に移せる。これはまた「夢を持つ」などというのと同じだ。夢のない人生ははかない。実は現在の政治状況の最大の問題は、「夢」が語られないことだ。多くの国民に「夢」を語らない首相、政治家は、国を混迷に陥らせる。もちろん、個人個人もそうだ。そういう「夢」を持っていたら、その人は生き生きしているだろう。そういう人は他人に感銘を与える。他人に影響を与えることができる。営業で言えば、ものを売るという行為の中にも「夢」がないと結局売れない。そういう「夢」を持っているからこそ、その夢を実現するために行動することになる。そしてそれはいずれ実現される。これは経営でも同じだ。

「アイデア」が鮮明になってくると「ありたい姿」のイメージがまとまり「ありたい姿」は「あるべき姿」となる。この「あるべき姿」を目的においてその手段に落とし込むと「チャレンジテーマ」が見つかる。
(金田秀治・近藤哲夫『トヨタ式ホワイトカラー革新』日本経済新聞社、96ページ)

経営の現場でも「ありたい姿」つまりは「思い」が必要なわけである。

決定的瞬間 バダラッコ『「決定的瞬間」の思考法』(東洋経済新報社、2004年)という本がある。ここでは詳述しないけれど、世の中一筋縄ではいかない。その本の監訳者金井壽宏氏が解説されているところを引用しよう。

「愛する人を大事にすること」と「愛する人を裏切ること」の間の選択なら、正邪ははっきりしている。また、「薬を購入すること」と、「薬を盗むこと」の間の選択もまた、正邪の自明な選択だ。……しかし、もし、あなたの最愛の人が病気で、それを治す薬が高価すぎてあなたには決して買えそうもないとしたらどうだろう。これがハ

インツの直面したジレンマだ。ジレンマとは、どちらの選択肢を選んでも困ったことにならざるを得ない、進退窮まる板ばさみ状態のことをいう。愛ゆえに盗むことも正しいし、どんなに愛する人のためとはいえ盗みをしないことも正しい。(242ページ)

バダラッコのこの著書はそういった究極の選択に直面する経営者はどうあるべきかを問うている。世の中そうそう簡単に正解が見つかるわけでもない。経営とはそういう正解のない、あるいはどちらも正解である可能性の高いなかでの選択をしなければならないものである。経営に限らない。人間は後になってみなければ正解かどうかわからない事柄に毎日出会う。けれどもその中で選択して行かざるを得ない。その際よりどころとなる何かを持っていないと苦しい。これが哲学(生活哲学といってもよい)が必要な理由である。そのためにも歴史に学ぶ必要がある。

夢、高い志 人間は(というか私はと言った方がよいかもしれないが)怠惰なものである。けれども何かをしたいものでもある。常に希望をもって前向きに生きている限り、何かを得られる。そう信じて生きて行きたいと、私は思っている。皆さんもそうであって欲しい。常に悩みながらも夢を持って生きていって欲しいと思う。

最後にもう一度、この混迷の時代にあっては、「思い」こそが大切ですと申し上げたい。そしてその「思い」は高い志であって欲しい。志が高ければ高いほど、自らが高みに達することができる。高い目線を持って欲しい。そしてあくまで姿勢は低くありたい。目線の高い人は腰も低いものである。

HPを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.finance.ritsumei.ac.jp/matsumura/>) もご覧下さい。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matsumura@mba.ritsumei.ac.jp)。

